しゃぼん玉の欠片を眺めて

作・大西弘記

■登場人物

幸生　正代幸生　築５０年の年老いた家で一人暮す
百合子　正代百合子　昨年の夏に他界（もっとも美しかった頃の姿）
夏雄　島村夏雄　有限会社ハウスクリーン島村代表取締役
真理　島村真理　ハウスクリーン島村社員　夏雄の娘
塚原　塚原道雄　アルバイト（真理の婚約者）
園浦　園浦匠　アルバイト（スーツアクター志望）
珠美　佐々木珠美　アルバイト（新婚）
河嶋　河嶋修　アルバイト（新人・元中学校教師）
文子　小倉文子　正代家長女　パート　未亡人
香織　小倉香織　その娘　大学３年生
文義　正代文義　正代家長男　サラリーマン
美里　正代美里　その妻　専業主婦
慶介　正代慶介　その息子　高校三年生
文代　正代文代　正代家次女　自営業　独身
店員　店員　喫茶ファミリアの店員
田中　田中悦子　老人ホーム従業員

■舞台美術

舞台中央に木の椅子が一つ置かれている。登退口は下手奥、センター奥、上手と３つある。劇中、正代幸生が住む築５０年の一間、ハウスクリーン島村の事務所、喫茶ファミリア、玉川の土手のシーンがある故に舞台上は高低があったほうが良い。

■情景

客電が消え、暗転になり、少しの無音。

老人のうら寂しい歌声が聞こえてくる。青白い照明が舞台中央に置かれた木の椅子だけに入る。木の椅子には歌を唄う老人がぽつねんと座っている。築５０年の家に一人で暮らす正代幸生である。次に幸生の左手少し後ろに照明が入り、娘である文子と孫の香織が立っている。追って幸生の右手少し前に照明が入り、息子夫婦の文義、美里と孫の慶介が立っている。最後に幸生の後ろに照明が入り、末っ子の文代が立っている。子供、孫たちは幸生を見ている。

プロローグ（サイン）

幸生が唄う。
今にも消えてしまいそうな声で、ゆっくりと唄っている。
ずっと遠くを眺めながら。

シャボン玉飛んだ
屋根まで飛んだ
屋根まで飛んで
こわれて消えた

シャボン玉消えた
飛ばずに消えた
産まれてすぐに
こわれて消えた

風、風、吹くな
シャボン玉飛ばそ―

幸生の唄の途中、香織が去ってゆく。追って美里と慶介も去る。それに構わず唄い続ける幸生を見ている文子、文義、文代。３人は互いに顔を見合わせ、また幸生を見る。やがて去ってゆく。構わず唄う幸生。今にも枯れてしまいそうな声で、しゃぼん玉を唄っている。その瞳は、確かに何かを見ている。

唄が終わる頃、作業着姿の塚原道雄がいつの間にか幸生の側に立っている。塚原は伝票が挟んであるファイルを持っている。ズボンの後ろポケットから薄い緑のゴム手袋が覗いている。

塚原　お客様。
幸生　・・・
塚原　正代様。
幸生　（塚原に気付く）
塚原　本日の作業、終了致しました。
幸生　ご苦労様。
塚原　作業後のご確認を。
幸生　信用していますから。
塚原　ありがとうございます（ファイルを見せ）本日の金額になります。
幸生　おつり、あるかい？
塚原　え。
幸生　大きいのしかなくてね。
塚原　あ、はい、車に。すぐに戻ってきます。
幸生　悪いね。
塚原　いえ。では、こちらの方にいつものサインを（ファイルを幸生に手渡し、去る）
幸生　（塚原を視線で追い、ファイルを見てサインをする。さっきまで見ていた何かをふたたび眺める。眉を八の字にして、幸生の顔は泣きそうに笑う）

明転

1（有限会社ハウスクリーン島村経営理念）

都内。二子玉川の近くにある有限会社ハウスクリーン島村の事務所。壁には大きなホワイトボードがかかっていて、半分を週間スケジュール、もう半分は当日のスケジュールが書かれている。ほか、従業員の名前もマグネットに書かれて貼ってある。作業着姿の島村真理が本日清掃作業に入る現場のファイルをチェックしている。ファイルは二種類ある。奥の部屋には島村夏雄がいるが姿は見えない。

真理　（ファイルを見ながら）えっと・・・北村邸は私と園浦さんで。
うわ！きっついな、これ。うんうん。あれ（奥へ）ねえ！お父ちゃん！
お父ちゃん！
夏雄　（奥から）勤務中！
真理　（軽くため息）社長！
夏雄　（奥から）何だ。
真理　私達の方の現場って駐車場あるの？
夏雄　（奥から）近場のパーキング。
真理　もう（ファイルに書き込みながら）見積もりに行ったんだったら、
報告書にちゃんと書いといてよ。現場着いてから困るんだから。
夏雄　（奥から）北村邸、追加で窓拭きも。
真理　（ファイルを見て）どこにも書いてないよ。
夏雄　（奥から）だから追加なんだよ。
真理　何枚？
夏雄　全部。あと網戸も。
真理　もう・・・（ファイルに書き込む）あ、お父ちゃん！
夏雄　・・・
真理　お父ちゃん！
夏雄　（奥から）勤務中！
真理　私と園浦さんだけじゃ大変なんだけど。
夏雄　・・・
真理　窓拭きとワックスだよ。
夏雄　・・・
真理　お父ちゃん！

トイレの流れる音が聞こえる。作業着姿の夏雄が登場。手にはクレピコが入った袋を持っている。

夏雄　勤務中は社長と呼ぶのが鉄則だろ。
真理　何それ。
夏雄　クレピコ。

真理　見ればわかるよ。
夏雄　じゃあ聞くなよ。
真理　今日のお父っ・・・社長の現場は現金払いですよ。
夏雄　わかってるよ。
真理　え？
夏雄　そういうこと。
真理　（ファイル見て）北村邸がカード決済なんて、どこにも書いてないけど。
夏雄　今、書いとけよ。
真理　お父ちゃんが見積もりに行った現場でしょ。
夏雄　（真理を凝視する）
真理　社長が見積もりに行かれた現場ですが。
夏雄　書き忘れたの。
真理　北村邸は新規のお客さんだよ。
夏雄　わかってるよ。
真理　・・・
夏雄　なんだよ。
真理　昨日も請求書に書いてあるお客さんの名前間違ってて、現場に入った珠さん、サインもらう時に困ったって言ってたよ。最近、ちょっと弛んでるんじゃないでしょうか、社長？
夏雄　そんな事ない。

珠美が私服姿で登場。

珠美　おはよう。
真理　あ、おはようございます。
夏雄　おっす。
珠美　朝の恒例行事になりましたね。
夏雄　何が。
珠美　真理ちゃんのお説教。
真理　本当ですよ。

夏雄　そんな事より体調は良いのか？
珠美　はい。
真理　あんまり無理しないでくださいね。何かあってからじゃ遅いから。
珠美　ありがとう。でも大丈夫。
夏雄　そうか。
真理　辛かったら遠慮なく言って下さいね。
珠美　うん。あ、じゃあ早速言っていいですか？
夏雄　いいよ。
珠美　問題です。
夏雄　え。
珠美　社長が間違えたお客さんの名前、正しいのはどっち。１、田中さん。２、中田さん、チッカッチッカッチッカッ・・・
夏雄　（凄く考えて）はい！
珠美　はい、社長。
夏雄　田中さん！
珠美　中田さんです（そのまま奥に去る）
夏雄　で、なに。
真理　え。
夏雄　え、じゃないだろ。こっちがトイレで一生懸命気張ってる時に。
真理　ああ。窓拭きが追加なら・・・
夏雄　大丈夫だよ。
真理　ワックスもあるのに？
夏雄　うん。
真理　（ファイルを見ながら）リビング、廊下、階段、別に３部屋。ざっと５０㎡はあるでしょ、これ。
夏雄　あるな。
真理　正代さんところが終わったら応援に来てくれるの？
夏雄　正代邸も大変だろ（もう一つのファイルを見て）キッチン、レンジフード、風呂、トイレ。
真理　あ。
夏雄　なんだよ？

真理　正代さんは先月から月一回の有難い定期契約なったんだから絶対に変なミスしないでね。
夏雄　わかってるよ、あの爺さん五月蠅いから。
真理　ちょっとお口が過ぎますよ、社長。
夏雄　はいはい（ファイル見ながら）でも半年に一回でいいのにな。
真理　何が？
夏雄　レンジフードと風呂だよ。年寄りの一人暮らしなら年に一回で十分か。
真理　有難くていいじゃん。
夏雄　そのうち週一回で依頼きたりしてな。
真理　そっちの車にも積んどくよ？
夏雄　何を。
真理　窓拭きの道具。
夏雄　いいよ。
真理　何で。
夏雄　正代邸はすぐそこだから応援に行けそうだったら事務所に一回戻って来るって。
真理　行けそうだったらじゃなくて来るの。わかった社長？

園浦が私服で登場。

園浦　おはよう。
真理　あ、おはようございます。
夏雄　おっす。
園浦　今日も通常運行ですね。
真理　何がですか？
園浦　真理ちゃんのお説教。
夏雄　さっさと着替えてこいよ。
園浦　はい。あ、真理ちゃん。
真理　はい。
園浦　来週の水曜日、シフト休みで出したけど、出勤に出来る？

真理　えっと（ホワイトボードの週刊スケジュールを確認して）いいですよ。
夏雄　オーディションじゃなかったのか。
園浦　企画自体がコケちゃってさ。
夏雄　そうか。まあ、次がんばれよ。
園浦　はい（奥へ去る）
真理　塚ちゃんは。
夏雄　新人と倉庫で車に道具積んでるよ。
真理　・・・新人って？
夏雄　新人は新人だよ。
真理　聞いてないけど。
夏雄　昨日の夜に面接して決まったんだよ。
真理　お父ちゃん。
夏雄　フレッシュな新人さんだからさ。
真理　そういう事じゃないでしょ。
夏雄　わかってるよ。
真理　わかってない。
夏雄　お前と俺で一生懸命に営業すればいいんだろ。
真理　そんな簡単な話でもないでしょ。
夏雄　大丈夫だよ。今までだって何とかしてきたんだからさ。それに北村邸の現場だって人手がほしいんだろ。
真理　それは今日だけの話でしょ。
夏雄　この夏を乗り越えれば、秋口から忙しくなってくるんだからさ。そん時になってから募集かけて、誰も来なかったら逆にお客さん減らすことになるだろ。今のうちに新人を育てておけば、繁忙期に戦力になってるよ。
真理　めっちゃ後付け。

塚原が作業着姿で登場。

塚原　お説教中、お疲れ様です。

夏雄　おう、恒例だからな。
真理　もう。お疲れ様。
塚原　一号車も二号車も道具積んでおきました。
夏雄　御苦労さん。新人さんは？
塚原　車の窓、拭いてます。
夏雄　あ、そう。で、どう？
塚原　どうって？
夏雄　大丈夫そう？
塚原　ああ、はい。多分。
夏雄　うん。
真理　多分って？

作業姿の河嶋が登場。

河嶋　おはようございます。
真理　おはようご・・・
夏雄　（真理に）新人の河嶋さん。
真理　（小声で）どこがフレッシュなの？
夏雄　（小声で）いいんだよ。
河嶋　え。
夏雄　あ、いえ。よろしくお願いします。
河嶋　今日からお世話になります。
真理　あ、島村真理です。よろしくお願いします。
河嶋　よろしくお願いします。
夏雄　朝礼の時間だぞ。

珠美と園浦が作業着姿で戻ってくる。島村の面々が朝礼の構図になる。正面奥に夏雄が立ち、そこからハの字に整列する。上手側に真理と珠美。下手側に塚原と園浦。夏雄が自分の隣に河嶋を誘導する。短い沈黙。

夏雄　今日から当社で働いてもらう事になりました。河嶋修さんです。

一言どうぞ。
河嶋　河嶋です。御歳５６歳のルーキーです。よろしくお願い致します。

沈黙

夏雄　拍手。
塚原　（拍手する。他の者も続く）
夏雄　本日の朝礼を始めます。おはようございます！
全員　おはようございます！

ここから従業員たちは夏雄の言葉に続いてカッコの部分を復唱してゆく。河嶋もおどおどしながら復唱についてゆく。

夏雄　ハウスクリーン島村経営理念。

一日一日の毎日とは（一日一日の毎日とは）
あなたの過ごす人生が（私の過ごす人生が）
辛く哀しく汚れていても（辛く哀しく汚れていても）
優しく嬉しく美しい物へ（優しく嬉しく美しい人へ）
生まれ変われる大切な一日です（生まれ変われる大切な一日です）
己の損得感情よりも（他人を喜ばせる愛情を）
他人の薄情を知っても（己の人情を忘れずに）
常に心を豊かにして（常に心を豊かにして）
生きがいのある毎日にすること（生きがいのある人生にすること）
私たちはそれを（幸せと呼びます）

明転

２（懐かしい笑顔）

正代邸。幸生が本を片手に将棋盤と向き合って座っている。時間が止

まったような空間。将棋盤の上にある駒は対局が進んでいる様子。

幸生　うん。ここで、こうくるか・・・（また少し考え、やがて本を閉じる。そして窓の外を眺める）こりゃ雨かな。

いつの間にか百合子が登場。幸生の視界に入らない位置にいる。

百合子　そうみたいですね。

幸生　（外を眺めながら）今年はよく降るね。

百合子　そうかしら。

幸生　そんなこともないか。

百合子　もう、お飽きになって？

幸生　これは棋譜だからね。将棋はひとりじゃ出来ないよ。

百合子　慶介は？

幸生　うん。

百合子　最近、あの子よく来るじゃない。

幸生　塾があるから今日は来れないってさ。

百合子　そう。頑張っているのね。

幸生　文義に似て勉強は出来るようだからな（本を開き、将棋の続きを始める）

百合子　そう。

幸生　なんで、こんな手を打つんだ・・・（また少し考え、やがて本を閉じる。外を眺める）あ、降ってきたね。

沈黙

百合子　私がお相手しましょうか？

幸生　お前、将棋なんか詰まらないって言ってたじゃないか。

百合子　だってわからないもの。

幸生　ルールがわからない素人を相手にしてもなあ。

百合子　もっと詰まらない？

幸生　・・・
百合子　（幸生の向かいに座る）さあ、ルールを教えてちょうだい。
幸生　じゃあ、一局指す・・・（そう言われて初めて百合子を見る）
百合子　なに。
幸生　・・・今日は、お迎えに、来たのか。
百合子　（笑う）
幸生　何がおかしい。
百合子　だって、あなた、まだ、とってもお元気じゃない。
幸生　そうかい。
百合子　そうよ。
幸生　・・・
百合子　なに。
幸生　だってお前。
百合子　なによ。
幸生　昨日までは婆さんだったじゃないか。
百合子　あなたと一緒になった頃の私の方があなた喜ぶでしょ。
幸生　（すごく嬉しそうな表情をするが、ふと真面目な顔に戻る）
百合子　どうしたの？
幸生　喜ぶのがなんだか申し訳ない気がしてくる。
百合子　誰に？
幸生　お前にだ。
百合子　（笑っている）
幸生　何がおかしい。
百合子　どっちも私よ。
幸生　そうだけどさ。でも、なんだかずるいなという気もしてくる。
百合子　どうして？
幸生　俺だけが爺さんじゃないか。
百合子　しょうがないじゃない。
幸生　どうして？
百合子　お爺さんなんだから。
幸生　そうだけどさ・・・

百合子　じゃあお婆さんの姿に戻りましょうか？
幸生　いやいや、いいんだ、それでいい。それがいい。
百合子　（微笑む）
幸生　（すごく嬉しそうな表情をするが、ふと真面目な顔に戻る）
百合子　どうしたの？
幸生　やっぱり申し訳ない気がしてくる。

インターホンが鳴る。

百合子　誰か来たわよ。
幸生　お前、出て・・・あ、無理か。

再度、インターホンが鳴る。玄関から塚原の声で『ハウスクリーン島村です。月いち定期の清掃訪問に参りました』と聞こえてくる。

幸生　あ、そうか、今日だったか（玄関へ去る）
百合子　（去る）

明転

3（着信拒否）

都内某所にある喫茶ファミリア。昼過ぎ。外は雨が降り出している。ボックス席に正代文代がいる。文代の手にはタブレットがあり、画面を真剣に見つめている。店員がアイスコーヒーを持って登場。文代に出す。

文代　（タブレットと睨めっこしている）
店員　ご注文は以上で宜しいでしょうか？
文代　はい。
店員　では、ごゆっくりどうぞ（去ろうとする）
文代　（一口飲んで）あ。

店員　はい。
文代　シロップもう少しもらえます？
店員　少々お待ち下さい。
文代　（再びタブレットと睨めっこしていると文代の携帯が鳴る）もし
もし、あ、そしたらアルタを背にして左に行くと靴屋あるでしょ。そ
こ左。うん。うん。少し行くと左手にあるから。うん、喫茶ファミリ
ア。喫茶ファミリア。うん、うん。じゃあ。

表扉の呼び鈴が鳴り、正代文義が登場。文義はスーツ姿。

店員　いらっしゃいませ。
文代　（文義に気が付き、手を上げる）
文義　（文代が座るボックスへ）ほんと、今年は雨が多いな。
文代　あれ、降ってるの？
文義　さっき降り出したよ。文子は？
文代　まだ。
店員　（シロップ、メニューと水を出す）こちらシロップです。
文代　ありがとう。
店員　ご注文がお決まりになりましたらお呼び下さい。
文義　じゃあ同じので。
店員　畏まりました（去る）
文代　（シロップを入れる）
文義　入れ過ぎだよ。
文代　（シロップをまだ入れる）
文義　入れ過ぎだって。どんだけ入れるんだよ。
文代　好きなの。
文義　ホントお前は昔っから大の甘党だよな。
文代　（遮るように）忙しいの？
文義　え。
文代　会社。
文義　まあな。お前は？

文代　ボチボチかな。
文義　然し、あれだな。
文代　ん。
文義　一番出来の悪かったお前が・・・
文代　トーナメント戦みたいもんじゃない？
文義　トーナメント戦？
文代　辞めたら、次、何する？
文義　何を？
文代　会社。
文義　辞める訳ないだろ。家のローンだってまだ残ってるのに。
文代　じゃあリストラされたら。
文義　何だよ急に。
文代　良い学校に入って、良い会社に就職して、所謂エリート、その人たちは社会のトーナメント戦を勝ち抜いたわけでしょ。
文義　まあな。
文代　だけど、誰もが羨ましがる会社に就職したのに、やれ仕事がつまんない、やれ人間関係が巧くいかないって言いだして会社を辞めたとする。
文義　そういう奴もいるだろうな。
文代　トーナメント戦、敗退。

店員がアイスコーヒーを持って登場。文義に出す。

店員　おまたせしました。
文義　ありがとう。
店員　どうぞ、ごゆっくり（去る）
文代　つまり負け組。
文義　（鼻で笑う）
文代　例えばさ、社会に出る事をリーグ戦って考える事が出来たら、一回負けても、ね。また次に負けたとしても、ね。そういう話。で、私はリーグ戦を闘っているの。

文義　そういう事は、成功していないと説得力に欠けるよ。
文代　みてなさいって。
文義　えらっそうに。
文代　まあ、お兄ちゃんはトーナメント戦を闘っているわけだし、私はリーグ戦を闘っているわけだし、何もしてない人にも闘ってもらわないとね。
文義　うん、そうだな。

表扉の呼び鈴が鳴り、小倉文子が登場。対応するため店員も登場。

店員　いらっしゃいませ。
文義　文子。
文子　（二人に気付いて側による）
文代　遅いよ。
文子　ごめん、ごめん。最近の若い子って本当に話が通じなくてさ。
文義　え。
文子　パート先で新人に棚卸教えてるんだけどさ、解ってるんだか解ってないんだか、こっちが解らないのよ。
文代　パートなんかしてるの？
文子　してるよ。
文代　いつから。
文子　半年くらい前。
文代　何でまた。必要ないじゃん。
文子　だって家にいてもつまんないでしょ。
店員　（メニューと水を出す）どうぞ。
文子　アイスティー。
店員　畏まりました（去る）
文義　始めるか。
文子　話してなかったの？
文義　待ってたんだよ。
文子　だって最近の若い子って本当に話が通じないんだよ。私、同じこ

とを三回も説明してさ・・・
文義　わかったよ。

沈黙

文子　やった方がいいよね、来月。
文代　何を？
文子　傘寿のお祝い。
文義　そうだな。
文代　さんじゅって？
文義　還暦、古稀、喜寿ってあるだろ。８０歳は傘寿。
文代　来月だっけ？
文子　１０日。
文代　じゃあ、どっか良い店、探してみる（タブレットを開ける）
文義　落ち着いた感じな。
文代　あ、そういえば西麻布に知り合いの店があってさ。
文子　あんまり好まないかもよ。
文代　西麻布？じゃあ表参道あたりで・・・
文子　出かけて食事会とか。
文代　タクシー使えばいいじゃん。
文子　出不精じゃない、あの人。
文義　そういえば、そうだな。
文代　じゃあ、あの家に家族みんなで集まる？

沈黙

文義　・・・文代。
文代　ん。
文義　最近、あの家に行ったか？
文代　あれ！何で知ってるの？
文子　え！行ったの？

文代　うん。
文義　いつ！
文代　一週間くらい前。
文子　何しに？
文代　なになに、自分が育った家に行くのっておかしい？
文子　おかしくはないけど、でもあんたが行くなんて、ねえ。
文義　ああ。どうせまったく行ってないんだろうなって思って、たまには行けよって言おうと思ったんだよ。
文代　お兄ちゃんは行ってるの？
文義　慶介に時々行かせてるよ。孫の方が喜ぶだろ。
文代　自分は？
文義　俺は忙しいからさ・・・
文代　お姉ちゃんは？
文子　私は、ほら、行きたいけど・・・
文代　なに。
文子　行きたいけどさ。
文代　だから、なにって。
文子　・・・距離置くの、あの人が。
文代　誰に？
文子　私に。
文代　何で？
文子　知らないよ。
文代　じゃあ香織ちゃんは？
文子　行くわけないじゃん、大学入れても遊んでばっかりなんだから。
文代　お姉ちゃんに似たんだよ。
文子　私じゃなくて主人よ。あの人も遊んでばっかりで家のことなんか何もしてくれなかったんだから。
文代　お兄さんか。
文子　新しいもの好きのところなんかそっくりで嫌になるよ。
文代　でもお兄さん、ちゃんと財産残してくれたじゃん。
文子　それは感謝してるけどさ。

文代　あ、じゃあさ、慶介くんと一緒に行かせればいいんじゃない？ねえ、お兄ちゃん。
文義　お袋のことじゃないか？
文子　え。
文義　姉ちゃん、真っ先に施設入れた方がいいって言ったからさ。
文子　あれは・・・仕方ないでしょ、あの人一人じゃ面倒見れなかったんだから。
文代　なんかあってからじゃ遅いしね。
文子　そうだよ。それに・・・
文義　なに。
文子　おむつしないと生活できない母さんを見てるのが辛かったの。あんなに元気だった人が。
文代　・・・
文子　それにあんたたち、全然母さんに会いに来なかったから解らないのよ、どんだけ大変だったか。私なんか毎日行ってたし。
文義　会社があるのに、そんな頻繁にはいけないよ。
文子　帰りに寄ればいいじゃん。あんたも。
文代　しょうがないでしょ、起業したばっかりの時だったんだからさ。それにお姉ちゃんがいちばん時間あったでしょ、働いてもなかったし。
文子　何、その言い方。
文義　やめろよ。
文子　・・・私だって。それに施設の方が何かと安心だったじゃない。亡くなる時だって、ちゃんと病院から連絡くれて、それで私たち三人、母さんの死に目にも会えたんだから。それなのに何で私だけが距離置かれなきゃいけないのよ。
文義　いや、姉ちゃんには感謝してるよ。なあ。
文代　うん。

やや長い沈黙

文義　俺のところは無理だ。

文子　は。
文義　前にも言ったけどさ。
文代　私も無理。
文子　なんで。
文代　やっと仕事が軌道に乗り出したところだし。
文子　また私に押し付けるつもりだ？
文義　いやいや、押し付けるとかそういうことじゃなくてさ。
文子　じゃあ何よ。
文義　いや、その・・・
文子　私、もう嫌だからね。
文代　でも一人にしておく訳にもいかないでしょ。
文子　まだ元気じゃない。
文義　弱りだしてからじゃ何かと遅いだろ。環境が変わるなら元気なうちに慣れてもらわないとさ。母さんの時だって、そうだったんだから。
文代　年より狙った詐欺事件も多いもんね。
文義　それも心配だよ。
文代　あと孤独死も。

沈黙

文義　多いらしいんだ、最近。
文代　高齢者の孤独死でしょ。
文子　縁起でもないからやめなよ。
文義　違うよ。
文代　違うの？
文子　じゃあ何？
文義　独り言。
文代　え。
文義　慶介が言ってたんだ。お爺ちゃん、よく独り言、言ってるって。
文子　何て言ってるの？
文義　誰かと喋ってるんだってさ。

文代　誰と？
文義　知らないよ。
文子　・・・
文義　あの家に戻ることも出来るわけだしさ。
文子　絶対に嫌、あんな古い家。それに就活迫った香織もいるのに。
文代　遊んでばっかなんでしょ。
文子　今はね。
文義　じゃあ香織が卒業してからでいいからさ、な。
文子　だって・・・
文義　一人家族が増えても変わらないだろ。ましてや香織からしたら爺ちゃんなんだから。
文子　あんたが正代家の長男じゃない。
文義　だから、俺のところには美里の両親がいるだろ。
文子　私、小倉家に嫁にいったんだけど。
文義　自分の親には変わりないだろ。
文子　あんたにも言える事でしょ。
文義　だから・・・
文子　嫌なもんは嫌なの。母さんの時で懲り懲り。
文義　姉ちゃん。
文子　そもそも結婚の条件？　何で長男が嫁の両親と同居するの？
文義　あのさ、２０年以上も前の話を今さら引っ張り出すなよ。
文子　だってそうでしょ。
文義　そんな事を言い出したら、姉ちゃんだって嫁に行ったっていっても、今は未亡人だろ。
文子　だから何？
文義　環境的には自分が一番適してると思わないのかよ。
文代　そうだよ。
文子　本当に自分勝手ね、あんたたち。
文義　姉ちゃん。
文子　私は？　私の生活は？
文義　そりゃわかるけどさ。俺たちだって出来ることはサポートするか

らさ。なあ。
文代　うん。
文子　でもお父さんだって・・・
文代　なに？
文子　嫌いなの、私のことが、あの人は。
文義　それは姉ちゃんがボケたお袋を施設に。
文子　だったら、あんた母さんの面倒見れたの？
文義　だから・・・
文代　お姉ちゃん話がずれてる。
文子　何でよ。だいたい、あんたも文義と同じだからね。
文代　何が？
文子　してたでしょ？
文代　何を？
文子　着信拒否。
文義　お前も？
文代　お兄ちゃんも？
文子　なんのために父さんや母さんに携帯持たせてたのよ。
文代　だって、あれは、ねえ。
文義　なあ。
文子　なによ。
文代　母さん、仕事中だろうと夜中だろうと関係なく何度も何度も電話してくるし、出たら出たで同じことばっか言ってるし、私とお姉ちゃんの名前、どっちがどっちだかわからない時だってあったし、お姉ちゃんのことだって・・・
文子　私がなによ？
文代　・・・怖いって。
文子　そりゃ怒るよ！こっちが色々とやってあげてるのに母さん私に文句ばっかり言うだもん。嫌味言われながらおむつを変えさせられる気持ちにもなってよ。あんた、そもそも親のおむつ変えられる？
文代　・・・
文子　あんたは？

文義　息子にされるのは嫌だろ。
文子　私だって嫌だったよ！でも父さんがしようとすると母さん泣いちゃうし。私しかいないじゃない。それなのに最後の方なんか私のことヘルパーさんだと思ってたし。
文義　それは仕方ないだろ、ボケちゃったんだから。
文子　仕方ないよ。でも、またその仕方ないのを私に押し付けるの、あんたたちは？
文義　押し付けるって、なあ。
文代　そうだよ、親なんだからさ。
文子　だから！それはあんたやあんたにも言えることでしょって言ってるの！
文義　でもほっとけないだろ！
文子　じゃあまた老人ホームに入れって私に言わせるわけね？

店員がレモンティーを持って登場。文子に出す。

店員　お待たせしました（去る）
文子・文義・文代　（飲み物を飲む）

明転

4（落ちない汚れ）

正代邸。ハウスクリーン島村の夏雄と塚原がリビングの窓の清掃を両面している。床には汚れ防止のシートが敷いてある。二人は上手と下手に別れて脚立に乗っている。三段と六段。二人の手元に河嶋がいる。幸生がその様子を椅子に座って監視するように見ている。窓拭きセットにバケツ、液体スプレーボトル、ブラシセット、ボックス、ガラススクイージー、スクレーパー、大量のウエスがある。夏雄と塚原の窓掃除は手際よく進んでいる。夏雄がスプレーボトルの溶剤を吹き、スクイージーで水を切ろうとするところ、幸生が窓際にやってくる。

幸生　ねえ。
夏雄　はい。
幸生　それ、落ちないの？
夏雄　ああ、これは難しいですね。
幸生　カビ？
夏雄　いや、水垢ですね。よくお風呂の鏡なんかにも付着するタイプで、
　機械使わないと。
幸生　そう。
夏雄　でも、そんなに目立ってないですから。
幸生　交換した方がいいかな。
夏雄　ガラスですか？
幸生　うん。
夏雄　この程度の水垢なら、どこのお宅にでもありますから、交換まで
　しなくても。
幸生　そうかい。
夏雄　色んな個所、リホームされてますけど、築何年なんですか？
幸生　５０年は暮らしてるかな。
夏雄　私、まだ生まれてないです。
幸生　あなたそんなに若いの？
夏雄　・・・すみません。
幸生　苦労されてるんだね。
夏雄　お陰さまで。
幸生　人が老いるように家も老いる。
夏雄　そうですね。
幸生　家が汚れるように人も汚れる。
夏雄　え。
幸生　（遮るように窓の拭き残しを指して）そこ。
塚原　え。はい。
幸生　拭き取れてないねえ、そこも。
塚原　はい（拭く）

幸生　そこそこ。
塚原　（拭き残しを探す）えっと・・・
幸生　あなたの右肩の横あたり。
塚原　あ、はい。
幸生　それと角の所、もう少し何とかならないかい？
塚原　河嶋さん、スクレーパー取ってもらっていいですか？
河嶋　はい（道具箱を漁る）
塚原　それじゃない、あ、それ、それです。
河嶋　これ。はい（渡す）
塚原　（スクレーパーをウエスに包んで窓の淵を拭く）
幸生　先週、綺麗に拭いてもらったばっかりなのにね。
夏雄　窓はどうしても、すぐに汚れますから。
幸生　（今度は夏雄の方を指して）そこ。
夏雄　え。あ、はい（拭く）

玄関のチャイムの音が鳴る。

幸生　そこもね。
塚原　はい。
幸生　それは疵？
塚原　気になります？
幸生　どうして窓に疵なんかつくのかね。
塚原　砂ですかね。
幸生　砂？
塚原　すぐそこに玉川があるじゃないですか。
幸生　何か関係あるの？
塚原　風が吹くんです。海からも山からも。

再び玄関のチャイムの音が鳴る。

幸生　風か。

夏雄　あの。
幸生　ん。
夏雄　誰か来られているみたいですけど。
幸生　あなた見てきてくれる？
河嶋　私ですか。
幸生　ええ。
河嶋　（夏雄を見る）
夏雄　（申し訳ないというジェスチャーを送る）
河嶋　はぁ～い（去る）
幸生　さっきの人、初めてだね。
夏雄　何がですか？
幸生　うちに来てもらうの。
夏雄　ああ。言われてみれば。
幸生　お宅の社長？
夏雄　・・・いえ、先々週入った新人です。
幸生　新人か。

正代慶介が学生服姿で登場。その後から河嶋も戻って来る。

慶介　こんにちは。
幸生　また来たのか。
慶介　今日はもう一人います。
幸生　誰だい？

小倉香織が登場。

香織　お爺ちゃん。
幸生　おお。二人揃って、どうしたんだい？
香織　二子玉の改札でばったり。
幸生　おっ母さんに死んでないか行ってみてこいって言われたんだろ？
香織　そういう訳じゃないよ。ねえ。

慶介　え。うん。

園浦が奥から登場。

園浦　お客様。
幸生　はい。
園浦　お風呂の清掃終わりましたので、ご確認をして頂いてもよろしいでしょうか？
幸生　いつもより早いんだね（そう言いながら奥へ）
園浦　はい、ただ先週もお伝えしましたけど目地のカビは落ちなくて（そう言いながら奥へ）
香織　なんだ、元気そうじゃん。
慶介　元気ないなんて言ってないじゃん。
香織　いつから来てるの？
慶介　先々週くらいから。
香織　あっそ。
慶介　文子おばちゃんに言われたんでしょ？
香織　うん。死んでないか見て来いって。
慶介　・・・
香織　嘘だよ。あんたは？
慶介　顔見せてやれって、父さんが。
香織　私もそれ。でも、どっちにしろだよ。
慶介　え。
香織　自分の親なのに（去ろうとする）
慶介　どこ行くの？
香織　帰る。
慶介　は。
香織　悪い？
慶介　今来たばっかじゃん。
香織　だって元気そうじゃん。
慶介　だから元気ないなんて言ってないじゃん。

香織　なら別にいいでしょ。
慶介　いいけど・・・
香織　これから友達と約束あるもん。慶介、どうせ暇なんでしょ。
慶介　暇じゃないよ。俺、受験生だし。
香織　あっそ。じゃあね。
慶介　ねえ。
香織　なに！
慶介　元気そうに見えるけど、そうじゃない時もあるよ。
香織　あのさ、お爺ちゃんだって私たちが揃ってここにいることで、ストレスになるかもしれないでしょ。
慶介　なんで？
香織　だってお爺ちゃんわかってるじゃん、完璧、私たちが何で来たか。
慶介　そうかな。
香織　そうだよ。じゃあね（去る）
慶介　ちょ・・・

真理が登場。油汚れの着いたエプロンをしている。薄緑のゴム手袋も。

真理　正代さんは？
夏雄　お風呂の確認。どうした？
真理　レンジフードのフィルターって新しいのあったっけ？
夏雄　ないの？
真理　うん。
塚原　いつもの所は？
真理　どこ？
塚原　冷蔵庫の隣にある棚の上。
真理　それ、前回入った時に最後の二枚だったと思うんだけど。
塚原　じゃあ、うちにあるのでもサイズ的には問題ないと思うよ。
真理　車に積んでる？
塚原　レンジフードセットの中に何枚か入れてある。
真理　本当（キッチンに戻る）

慶介　あの。
夏雄・塚原・河嶋　はい。
慶介　・・・
夏雄　（塚原に対応しろという仕草）
塚原　（慶介に）はい。
慶介　先週も来てましたよね？
塚原　ええ。
慶介　そんなに汚れるものなんですか？
塚原　そんなにって？
慶介　僕の家は業者を呼んでまで掃除はしないんで。
夏雄　（窓を掃除しながら）お孫さんでいいのかな？
慶介　はい。
夏雄　お父さんとお母さんに言っておいてよ。もし業者に掃除お願いするなら、ハウスクリーン島村がいいよって。
塚原　社長。
夏雄　なに。
塚原　高校生ですよ。
夏雄　営業だよ営業。言っておいてね。
慶介　いくらくらいかかるんですか？
夏雄　え。
慶介　掃除代。
夏雄　場所によるかな。
慶介　親に言っておくから教えてもらっていいですか？
夏雄　本当に。河嶋さん。
河嶋　はい。
夏雄　ファイルにうちのチラシ挿んであるから、渡してあげて下さい。
河嶋　はい（ファイルからチラシを出して慶介に渡す）これです。
慶介　（チラシを見て）ありがとうございます。
夏雄　家族割あるって言っておいてね。
塚原　そんなのありましたっけ？
夏雄　いいんだよ。

慶介　これ見る限りだと結構かかりますよね。
夏雄　そりゃ、プロの掃除屋ですから。あ、でも大手とかに依頼すると、もっと高いよ。うちは個人だからね。お父さんとお母さんによろしく言っておいて。

珠美が買い物袋を二つ持って登場。一つはスーパーなどで購入出来る、日常食用品。もう一つは生活用品。

珠美　ただいま戻りました。
夏雄　お、珠ちゃんお帰り。
珠美　すみません、遅くなって。
夏雄　いいの、いいの。

奥から幸生と園浦が登場

幸生　御苦労さま。台所に持ってってくれるかい？
珠美　畏まりました。
幸生　あと、お米研いでもらっていいかな？
珠美　え？
幸生　ついでに。
珠美　（夏雄を見る）
夏雄　（申し訳ないという仕草を送る）
珠美　あ、はい。何合研げばいいでしょうか？
幸生　そうだね。慶介。
慶介　ん。
幸生　夕飯食べてくかい？
慶介　うん。
幸生　香織は？
慶介　あ、えっと、なんかバイトがあるって。
幸生　帰ったの？
慶介　うん・・・

幸生　そうか。じゃあ、二合お願いしていいかな？
珠美　畏まりました（台所へ去る）
幸生　それと冷凍庫に入ってる鳥肉をね（台所へ去る）
園浦　なんか手伝います？
夏雄　（脚立から下りて拭き残しが無いかを探している）そっち、どう？
塚原　もう少しです（仕上げにかかっている）
夏雄　じゃあ河嶋さんと車に道具積んじゃって（片付け出して去る）
園浦　了解っす（道具を片付け出して去る）
河嶋　（道具を片付けて去る）
塚原　（今拭いている窓の清掃が終わる）よしっと。
慶介　（清掃後の窓を見て）綺麗になったからよく見えますね。
塚原　え。
慶介　玉川の土手。
塚原　ありがとうございます。
慶介　でも、これじゃあ丸見えじゃないですか？
塚原　何が？
慶介　家の中。土手から。
塚原　・・・
慶介　あ。
塚原　（道具を片付けている）
慶介　汚れ、落ちてませんよ。
塚原　どこ？
慶介　ここ。
塚原　これは水垢です。
慶介　落ちないんですか？
塚原　ええ。
慶介　何で？
塚原　落ちない汚れもあるんですよ。

明転

5（ひとりで見る花火）

一週間後の午前。玉川の河川敷。蝉時雨は田園都市線の電車が幸生と真理の頭上を走ってゆく音でかき消されている。真理は作業着姿でエコバックと水筒を持っている。進路は上流へ。

真理　そろそろ休憩しませんか？
幸生　え。
真理　休憩です。
幸生　何にも聞こえないよ。
真理　（電車が通り過ぎるのを待って）休憩しませんか？
幸生　草臥れたの？
真理　私は大丈夫ですけど正代さんが。
幸生　僕は大丈夫です。でも、あなたが疲れてそうだから一休みしようか。
真理　は。はい（バックから敷物を出して敷く）
幸生　ああ、どうも。
真理　（バックから水筒を出し、幸生に御茶を汲んであげる）どうぞ。
幸生　ありがとう。美味しい。
真理　（バックからペットボトルを出し、自分も飲む）
幸生　涼しいね。
真理　まだ午前中ですから。
幸生　午後でも、ここは風通しが良いんですよ。
真理　よく、この河川敷を散歩されてるんですか？
幸生　そうだね、でも久しぶりかな（間）ここからね。
真理　ええ。
幸生　富士山、見えるの知ってる？
真理　はい。
幸生　あ、そう。こっちの人？
真理　え？
幸生　生まれ。

真理　はい、うちの事務所もすぐそこなんです。
幸生　知ってますよ。二階建のでしょ。
真理　はい、古い建物です。
幸生　僕の家の方が古いね。
真理　でも綺麗にされてるじゃないですか？
幸生　綺麗にして頂いているんです。
真理　ありがとうございます。
幸生　掃除だけしてもらっていればいいのに。悪いね。
真理　いえ。私も散歩したかったですから。

沈黙

幸生　どうしてかな・・・
真理　何がですか？
幸生　よく孫が来るでしょ。
真理　正代さんに会いたいからじゃないんですか？
幸生　そうかな、どうかな。
真理　どうして、そう思うんですか？
幸生　嬉しいけどね。会いに来てくれるのは。でも最近なんだよ。よく、来るようになったの。
真理　お子さんのご家族といっしょに暮らしたりはしないんですか？
幸生　（少し考えて笑う）
真理　どうしてですか。
幸生　ごめんなさいね。
真理　いえ。
幸生　こないだ、えっと・・・文子、文代・・・
真理　誰ですか？
幸生　末っ子。
真理　正代さんのですか？
幸生　ひょっこり顔を出してね。
真理　はい。

幸生　えっと、下だから文代だ、文代。
真理　文代さん。
幸生　突然来て僕に言うんだよ。
真理　何てですか？
幸生　年寄りの一人暮らしは心配だって。
真理　優しい娘さんですね。
幸生　文子・・・文代・・・うちの末っ子。
真理　文代さん。
幸生　文代（笑っている）
真理　（つられて笑う）
幸生　そういえば爽やかな好青年いるでしょ。
真理　え。
幸生　ほら、いつも窓掃除を丁寧にやってくれる、まだ若い。
真理　ああ、はい。塚原ですね。
幸生　そうそう、塚原さん。
真理　そんな若くないですけど塚原が何かありましたか？
幸生　彼、独身ですか？
真理　え。はい。
幸生　お見合いしないかな？
真理　は？
幸生　うちの文子、文代・・・あれ、どっちだ。文代、末っ子。
真理　・・・
幸生　（笑っている）
真理　（合わせ笑い）
幸生　僕ね。
真理　はい。
幸生　怖いんだよ。
真理　何がですか？
幸生　子供たちに遠慮しながら暮らすの。
真理　え・・・

この時、真理の携帯が鳴る。真理、着信先を確認する。

真理　あ、会社からなんで出てもいいですか？
幸生　どうぞ。
真理　（電話に出る）あ、もしもし。え、見積書？切れたの？じゃあ新しいのが私のデスクの棚に（幸生を気にして去る）
幸生　（玉川を眺めている）

いつの間にか百合子が幸生の傍にいる。そして隣に座る。

幸生　なんだ、付いてきたのか。
百合子　だって、ここは私が元気な頃に二人でよくお散歩したでしょ。
幸生　今日は富士山が見えないね。
百合子　怖いんですか？
幸生　・・・
百合子　でも見えなくっても富士山はあるのよ、ちゃんと。
幸生　知ってるよ。
百合子　人は見えないと不安になるのよ。
幸生　・・・知ってるよ。
百合子　そう。
幸生　バカだな。
百合子　誰が？
幸生　俺だよ。
百合子　どうして？
幸生　さっきの人に、あんなことを言っても仕方がないのにね。
百合子　そう？
幸生　うん。
百合子　私は良いと思うわ。
幸生　そうかい。
百合子　だって。
幸生　なんだい？

百合子　私とばっかり話していても。
幸生　ぼけ老人の戯言になるかい。
百合子　（笑う）
幸生　なんだい。
百合子　ううん。そういえば、もうすぐね。
幸生　何が？
百合子　玉川の花火大会。
幸生　ああ、そうだね。今年は確か１９日だったかな。
百合子　去年は見れなかった。
幸生　え。
百合子　わたし。
幸生　何言ってるんだい、一緒に見ただろ。縁側で西瓜食べながらさ。
百合子　それは一昨年よ。去年は・・・
幸生　ああ、そうか。もう施設にいたのか。
百合子　あなたは見たの？
幸生　見たよ。縁側から。
百合子　そう。
幸生　今年はもう見ないよ。
百合子　どうして？
幸生　ひとりで見る花火は詰まらない。
百合子　じゃあ、今年は一緒に（去ってゆく）
幸生　うん。そうだね、じゃあトウモロコシでも齧りながら花火を見上げるか。なあ。（そこには誰もいない。眉を八の字にして笑う）

田園都市線の電車が幸生の頭上を走ってゆく。その間に舞台の低い処に塚原と珠美が登場。窓拭き掃除をしている。塚原が上手。珠美が下手。幸生は戻って来た真理に連れられて散歩の続きをするように退場。

珠美　そんなプランうちの会社にありましたっけ？
塚原　ないよ。
珠美　じゃあ、どうしてですか？

塚原　でも、こうやって掃除もしてる訳だしさ。
珠美　週に一回の掃除も直ぐに終わっちゃうじゃないですか。
塚原　・・・
珠美　聞いてます？
塚原　聞いてるよ。
珠美　社長は何か言ってました？
塚原　別に。
珠美　・・・
塚原　そういえば正代邸が終わったら園浦さんの現場へ助っ人に行ってくれって連絡があった。
珠美　社長は？
塚原　別宅で見積もりだってさ。
珠美　園浦さん、今日はどこの現場でしたっけ？
塚原　二子新地ボーリバージュアパートの共有部分。
珠美　一人で十分じゃないですか。
塚原　草むしりも追加で入ったってさ。
珠美　うわ・・・
塚原　いいよ、俺が行ってくるから。珠ちゃん、真理が帰って来たら河嶋さんと上がっていいよ。
珠美　塚原さん、この現場のチーフなのに？
塚原　真理がいるから大丈夫だって。
珠美　・・・
塚原　なに。
珠美　別に。
塚原　じゃあ、頼んだからね。
珠美　あ。
塚原　ん。
珠美　わかった。
塚原　何が。
珠美　塚原さん、怖いんでしょ？
塚原　え？

珠美　あのお孫さんに、また嫌み言われるの。

上手登退口から河嶋が登場。

河嶋　塚原さん。

塚原　はい。

河嶋　お風呂終わったんで確認してもらっていいですか？

塚原　わかりました（河嶋と上手登退口へ去る）終わったら、道具車に積んじゃっていいから。

珠美　了解しました（掃除道具を片付け始める）

舞台センター口から塚原と河嶋が登場。河嶋はバスシューズを履き、塚原はズボンの裾をロールアップして裸足になっている。珠美は片づけが終わったら、そのまま下手登退口へ去る。

塚原　正代邸のお風呂は毎週園浦さんが綺麗にしてくれてるんで、汚れなんか殆どないんですけど、他の家だと、この浴槽の壁に石鹸カスがこびり付いたりしてるんで、そういう時は茶パットかスクレーパーで擦ると落ちます。

河嶋　（メモ帳に書き込む）はい。

塚原　でも、強く擦ると疵を付けちゃう恐れもあるんで、気を付けて下さい。俺、昔、弁償させられた事があるんで。

河嶋　弁償ですか？

塚原　はい、会社が持ってくれましたけどね。

河嶋　気を付けます。

塚原　あと、天井にもカビがあるお宅もありますけど、カビは浴室洗剤じゃ落ちないので、カビ取り洗剤でしっかり落して下さい。

河嶋　はい。あの、このメジのカビは・・・

塚原　これは、もう落ちないです。

下手登退口から慶介が制服姿で登場。部屋をキョロキョロして、窓の

向こうを見ている。

河嶋　そういう場合は・・・

塚原　作業に入る前にお客さんに説明しておけば問題ないです。

河嶋　はい。

塚原　絶対に気を付けてほしいのが浴室洗剤とカビ取り洗剤が混ざらないように。危険なんで。

河嶋　ああ、そうですね。

塚原　え？

河嶋　浴室洗剤は酸性でカビ取り洗剤は塩素だからでしょ。

塚原　ええ。よく知ってますね？

河嶋　え・・・ああ、常識ですよ、常識。

塚原　なんで、浴室洗剤のあとはしっかりシャワーで洗い流してから、カビ取り洗剤を使って下さい。反応すると目と喉が痛くなります。

河嶋　わかりました。

塚原　排水溝に詰まってる髪の毛も忘れないでくださいね。

河嶋　はい。

塚原　こんな感じでＯＫです（去る）

河嶋　ありがとうございます（去る）

慶介　（窓の向こうを見ている）

塚原と河嶋が上手登退口か登場。風呂掃除の道具を持っている。

塚原　じゃあ、今度からは違う現場の風呂、一人で出来ますね。

河嶋　頑張ってみます。

塚原　（慶介に気付き）お邪魔しています。

慶介　・・・

河嶋　道具、車に積んじゃいますね（下手へ去る）

塚原　お願いします（自分が掃除していた窓の前に戻って仕上げる）

慶介　お爺ちゃんはどこに行ったんですか？

塚原　散歩です。

慶介　一人で？
塚原　うちの従業員と。
慶介　何で？
塚原　さあ。
慶介　今日はどこの掃除ですか？
塚原　窓とお風呂、散歩・・・です。はい。
慶介　そんなに汚れてませんよね？
塚原　え。
慶介　お爺ちゃん、一人暮らしだし。
塚原　家族で住んでる家と比べれば。
慶介　何で頻繁に来るの？
塚原　依頼を頂いているからです。
慶介　お爺ちゃんからですか？
塚原　勿論。
慶介　散歩もですか？
塚原　それは最近になってからです。
慶介　ってか高いですよね、掃除代。
塚原　安くはないですね。
慶介　必要あると思います？
塚原　え？
慶介　掃除。
塚原　必要な人には。
慶介　お爺ちゃんの家です。
塚原　正代さんの要望ですから。
慶介　お願いされたら何でもするんですか？
塚原　何でもって訳じゃないけど。
慶介　他にも行ってるんでしょ？
塚原　どこにですか？
慶介　年寄りの一人暮らし狙って。

沈黙

塚原　何が言いたいの？
慶介　今日はいくら取るんですか？
塚原　取る？
慶介　はい。
塚原　それはお爺さんに聞いてください。
慶介　言えないんですか？
塚原　何か勘違いしてないかな？
慶介　汚れてもないところ掃除して、散歩の付き添いなんかして、お金、取るんでしょ？いくら？
塚原　そういう業者じゃないから。
慶介　そういう業者って？
塚原　（掃除道具を片付け去ろうとする）
慶介　じゃあ、どういう業者なんですか？
塚原　ハウスクリーン。

明転

6（プライドと罪悪感）

ハウスクリーン島村の事務所。夕方頃。作業服姿のままでいる夏雄と事務服の真理。真理は従業員に手渡す給料袋の確認をしている。夏雄は洗濯して干したウエスをたたんでいる。そこにその日の作業を終えた園浦が私服に着替えて登場する。

園浦　お疲れ様っす。
夏雄　おう、お疲れ。何、ニヤニヤしてんだよ。
園浦　だって、今日は、ねえ。
真理　（給料袋を渡して）今月も御苦労さまでした。
園浦　（受け取り）ありがとうございます！
夏雄　中、ちゃんと確認しろよ。

園浦　ういっす。あ、そういえば今日入った用賀の増田邸なんですけど。
夏雄　うん。
園浦　奥さん、お隣さんを紹介してくれて。
夏雄　おう。
園浦　エアコンとレンジフードやってほしいそうです。
夏雄　本当に！
園浦　はい。チラシを渡してきたんで明日にでも電話あると思います。
夏雄　よくやった。
園浦　はい！あ、真理ちゃん、対応よろしくね。岡部さんです。
真理　岡部さん、わかりました。電話頂いたら、すぐ見積もり行ってきますね。
園浦　お願いします。

私服に着替えた珠美が登場

珠美　お疲れ様です。
夏雄　おう。
真理　（給料袋を渡して）珠さん、今月も御苦労さまでした。
珠美　あ、今日でしたね。忘れてた。ありがとうございます。
夏雄　得した気分だな。
珠美　はい。
真理　身体、辛くないですか？
珠美　うん、もうとっくに安定期入ってるし。
夏雄　無理すんなよ。
珠美　はい。
園浦　真理ちゃんの方はどうなの？
真理　え。
園浦　まだ？
夏雄　うちの娘は結婚してからじゃないと、そういうの認めないから。
園浦　厳しい。
珠美　っていっても来年だよね、結婚式。

真理　はい。珠さんは挙げないんですか？
珠美　式？
真理　はい。
珠美　もともと結婚するつもりなかったからね。
夏雄　それでよくしたな。
珠美　だって出来ちゃったから。
夏雄　実に今時。
珠美　社長も良いんじゃないですか、再婚されても。
夏雄　え。
真理　どっかに良い人いませんかね？
夏雄　俺は仕事一筋なんだよ。
珠美　私はカッコいいと思うけどな。
夏雄　（照れてる）
真理　そうですか？
珠美　黙ってるとね。
夏雄　その封筒、返せ。
珠美　園浦さんのことですよ。
園浦　俺。
珠美　はい。
園浦　俺は黙ってなくてもカッコいいでしょ。

沈黙

園浦　なんか言ってよ。
夏雄　無理。
園浦　ってか俺には夢があるから、今のところ結婚は考えてないの。
真理　相手がいないだけでしょ。
珠美　いないだけでしょ。
園浦　いないだけだよ！
夏雄　頑張れよ。
園浦　あんたもな！

夏雄　その封筒、返せ。
園浦　嘘っすよ、嘘。

塚原と河嶋が作業着姿で事務所に帰って来る。

塚原　ただいま戻りました。
河嶋　お疲れ様です。
真理　お帰りなさい。
夏雄　お疲れ。遅かったな。
塚原　ええ。
夏雄　そしたら事務所閉めて飲みに行くか。
園浦　行きましょ、行きましょう！
真理　でも珠さん・・・
園浦　あ、そっか。
珠美　私、ソフトドリンクで大丈夫。それに今日は河嶋さんの歓迎会じゃないですか。
河嶋　恐縮です。
夏雄　じゃあ二人とも早く着替えてきて。
河嶋　はい。
塚原　社長。
夏雄　あ、俺もか。
塚原　夏雄さん。
夏雄　心配するなって。
塚原　え？
夏雄　給料だろ。ちゃんとあるから。
塚原　明日また来てくれって・・・
夏雄　誰が？
塚原　正代さんです。

間

真理　明日？
塚原　うん。
園浦　ってか、今日も塚ちゃんと河嶋さんで入ったんでしょ？
河嶋　私は殆どお使いでしたけど。
夏雄　依頼があるんだったら有難いじゃねえか。
塚原　そうですけど・・・
夏雄　なんか不満か？
塚原　不満ていうか・・・
夏雄　どうした？
塚原　何にも思わないんですか？
夏雄　また、あの生意気な孫に何か言われたのか？
塚原　今日は正代さんお一人でしたよ。自分達が帰るまでは。
夏雄　明日、また塚に入ってもらっても大丈夫か？
真理　等々力の木村邸が二人で間に合うなら。
夏雄　うん。じゃあ、頼むわ。
塚原　断りませんか？
夏雄　何を？
塚原　清掃依頼です。
夏雄　何で？
塚原　だって・・・
夏雄　何だよ。
塚原　この仕事、普通の掃除じゃ中々落ちない汚れを綺麗に落とすから、本当にお客さんに喜んでもらえて、それ凄く嬉しいし、頑固な油汚れが落ちるのも張り合いがあるし・・・
夏雄　それでいいじゃねえか。
塚原　プライドがあります。それなのに罪悪感もあります。

沈黙

夏雄　真理。
真理　はい。

夏雄　今後の正代邸の清掃から塚原外してくれ。
真理　お父ちゃん。
夏雄　定期契約のお客さん宅に行きたくない従業員を行かせるわけにもいかないだろ。
塚原　俺らってプロの掃除屋ですよね。
夏雄　当たり前だろ。
塚原　じゃあプロの仕事しましょうよ。
夏雄　してるじゃねぇか！
塚原　正代邸、俺らが入る程の汚れじゃないじゃないですか！
夏雄　掃除してくれって依頼があるんだったら爺ちゃんからしたら汚れてるんだよ！
塚原　どこがですか？
夏雄　正代の爺ちゃんに聞け！
塚原　風呂だってキッチンだって掃除する前から綺麗なんですよ？
夏雄　それでも依頼を頂いたら掃除するのが俺たちの仕事なんだよ！
珠美　私も塚原さんと同じです。
夏雄　え。
珠美　買い物とか、お散歩の付き添いとか、料理とか、こないだなんて結婚したって言ったら、正代さん、亡くなられた奥さんがよく作ってくれた肉じゃがと煮物の作り方教えてくれて。そんなんでお金頂いていいのかなって・・・
夏雄　真理。
真理　はい。
夏雄　明日の正代邸は園浦と河嶋さんにしておいてくれ。
真理　・・・
夏雄　等々力の木村邸に塚原と珠美。俺は営業に行く。
園浦　自分も掃除の仕事がしたいです。

間

夏雄　そういう事か。

園浦　え？
夏雄　俺を疑ってるんだろ？
真理　お父ちゃん。
夏雄　一人暮らしの年寄りをカモにしてるって言いたいんだろ？
珠美　違います！
園浦　そんなんじゃないですよ。
夏雄　塚。
塚原　はい。
夏雄　そう言いたいんだろ？
塚原　・・・
夏雄　これだけは言っておくよ。皆に給料出せるのはな、どんな依頼だろうと仕事があるからなんだよ。こんな不景気な時代に、うちみたいなちっぽけな会社が生き残っていられるのも、お客さんあっての話なんだよ。
塚原　でも、自分達はホームヘルパーやお手伝いじゃないです。
夏雄　だからお前行かなくていいよ！
塚原　・・・お先に失礼します（去る）

沈黙

園浦　自分も今日は真っすぐ帰ります。
真理　お疲れさまでした。
園浦　お疲れさま（去る）
夏雄　珠ちゃん。
珠美　はい・・・
夏雄　家で待ってるんだろ？
珠美　え？
夏雄　旦那さんだよ。
珠美　はい。
夏雄　上がっていいよ。
珠美　お疲れ様でした（去る）

夏雄　塚に給料、持ってってやれ。
真理　うん（塚原を追いかけ、去る）
夏雄　（両手で頭を抱え、大きくため息）
河島　（夏雄の傍に寄ろうとするが思いとどまる）
夏雄　あ、なんか、すみません。
河嶋　何で？
夏雄　歓迎会するって言ってたのに。
河嶋　いいよ。
夏雄　本当にすみません。
河嶋　いいよ、いいって（間）良い部下持ったな。
夏雄　え。
河嶋　この一か月、ここで働きだして見させてもらったけどさ。
夏雄　あ、これ（給料袋を渡す）今月、御苦労さまでした。
河嶋　ありがとうございます（間）この歳でフリーターになっちまった俺が言うのも何だけど、良い会社ってのは、お客さんがある前に、良い人材があってじゃないか？
夏雄　実際、今年持つかどうかわからない掃除会社です。プール金もそんなにないし。だから仕事を選んでる場合じゃなくて。
河嶋　悪いな、そんな時に。
夏雄　え？
河嶋　雇ってもらって。
夏雄　いえ。
河嶋　俺は経営なんかしたことないし、サラリーマンやったこともないから解らないけど、でもお前と彼らだったらなんとかなるような気がするよ。
夏雄　ありがとうございます。
河嶋　然し、困ったな。
夏雄　え。
河嶋　明日、正代さんの家で何をすればいいやら。
夏雄　・・・先生。
河島　ん。

夏雄　一杯、付き合ってもらっても良いですか。
河嶋　いいよ。

明転

7（依頼の理由）

同日。ハウスクリーン島村の事務所から歩いて数分の玉川土手。ヒグラシ時雨。夕日が一日の役目を終え、沈む頃。誰かの心が沈んでゆくように。塚原が歩いていると後ろから真理の声が聞こえてくる。

真理　待ってよ。塚ちゃん。
塚原　・・・
真理　（息を切らしている）河嶋さんの歓迎会やる予定だったのに。
塚原　真理、行っておいでよ。
真理　もう、みんな帰っちゃったよ。
塚原　・・・
真理　今月も御苦労さまでした（給料袋を渡す）
塚原　ありがとうございます。
真理　（土手に座る）今時手渡しってないよね。
塚原　（隣に座る）え。
真理　お給料。
塚原　ああ。
真理　普通振込みでしょ。
塚原　そうだね。
真理　銀行から降ろしてきたり、大金持ち歩いたりするの私の仕事だから怖いって言ってるのに、お父ちゃん振り込みで出すのは嫌だってきかないから。
塚原　知ってる。
真理　ちゃんとみんなの顔を見て御苦労さまって言いたいんだって。
塚原　知ってる。

真理　でもそれも私の仕事になりつつあるけど。
塚原　知ってる。

沈黙

真理　（西の方を見て）あ。
塚原　ん（真理の目線を追い）あ。
真理　不思議だね。
塚原　何が。
真理　あんな風に富士山の後ろに沈んでゆくんだよ。
塚原　うん。
真理　まだ塚ちゃんがうちの会社で働く前ね。
塚原　え。
真理　仕事帰り、この土手から富士山に隠れてゆく夕日をよく見てた。
塚原　うん。
真理　今みたいにとっても綺麗なんだけど、でもなんだか寂しくもなったりして。ここでよく泣いてた。
塚原　真理が？
真理　うん。
塚原　どうして？
真理　わからない。
塚原　なんだそれ。
真理　でも哀しい時は、いつもこんな夕焼け。
塚原　・・・今も？
真理　（無理に微笑む）
塚原　疑ってるように見えたから？
真理　え？
塚原　俺が。夏雄さんを。
真理　疑いたくなるように見えた？
塚原　え？
真理　塚ちゃん。お父ちゃんを。

塚原　正代さんからの依頼だから。それに別に会社が無理に営業してい
るわけじゃないし。
真理　うん。
塚原　俺の問題かなって。
真理　・・・
塚原　でも最近の正代さん見てるとなんだか可哀想にも見えてくるんだ
よな。
真理　・・・私も。
塚原　老いるって、ああいうことなのかな？
真理　ああいうことって？
塚原　一人ぼっち。
真理　・・・
塚原　お孫さんがよく来て将棋やってるけど、なんか残った時間を消化
してるみたいでさ、正代さんの。
真理　・・・
塚原　どうした？
真理　私がお嫁にいったら、うちのお父ちゃんも・・・
塚原　（間）大丈夫だよ。
真理　え。
塚原　俺がちゃんと面倒見るからさ。
真理　（顔がゆっくりと皺くちゃになってゆく）
塚原　なに、泣かないでよ、俺が泣かしたみたいになるだろ。
真理　だって、そうじゃん。
塚原　（鞄から穴の空いたウエスを出して）はい。
真理　ありが・・・これ、仕事道具じゃん。
塚原　洗濯してあるから。
真理　そういうことじゃないけど、ありがとう。
塚原　うん。
真理　・・・何で依頼するのかな？
塚原　え。
真理　正代さん。

塚原　ああ。
真理　半年に一回が月に一回になって、週一回になって・・・
塚原　行くよ。
真理　え？
塚原　明日も、正代さんのお宅に。
真理　うん。

夕焼けが段々と見えなくなってゆく。

塚原　（不意に立ち上がる）
真理　もう少し、ここにいようよ。
塚原　腹減ったもん。
真理　もう少しだけ。
塚原　暗くなってくるぞ。
真理　そういうとこ、わかってないよね（不機嫌に立ち上がり歩き出す）
塚原　何がだよ（追いかける）
真理　（不意に止る）
塚原　どうしたの。
真理　あれ（指さす方向に正代邸がある）
塚原　ああ。
真理　いっしょにいるの誰？
塚原　息子さんたちだよ。今日来るって言ってたから。

ヒグラシの鳴き声から夜の虫の鳴き声へとシンクロしてゆき玉川の土手から正代邸の中へ移ってゆく。塚原と真理はそのまま去る。幸生、文子、文義、美里、香織、慶介が登場する。幸生と慶介は将棋をしていて終盤に差し掛かっている。それを傍で香織が見物している。長い沈黙

慶介　（一手指す）
幸生　・・・参りました。
香織　え、嘘！なんで？

幸生　いや、慶介、お前棋士になった方が良いんじゃないか？
慶介　（照れている）
文義　いやいや、慶介は良い大学に入ってもらわないと。な。
慶介　え・・・
幸生　勉強が出来て、良い大学入って、良い会社に勤めてもな。
文義　俺のこと言ってんのかよ。
幸生　いや、お前は優秀な息子だ。
文義　なんか嫌味に聞こえるんだよな。
美里　あなた。
幸生　そう聞こえるのは根性がひん曲がってるからだ。
文義　どういう意味だよ。
文子　やめなよ。
美里　そうよ、今日はお義父さんの傘寿のお祝いなんだから。
文義　だからこうやって集まってるだろ。
幸生　俺は別に集まって祝ってほしいなんて言ってもいないし、思ってもいない。
文義　（苦笑）
文子　父さん。
幸生　なんだ。
文子　それは言い過ぎじゃない。
幸生　さあ、もう一局指すか。
慶介　え、うん。
香織　お爺ちゃん、私も入れてよ。
幸生　三人で将棋は出来な・・・あ、山崩しするか。
香織　なにそれ。
幸生　（駒をケースに入れて山を作る）こうやってな、ほら、山になっただろ。
香織　うん。
幸生　順番にひと駒ずつ、この山から音をたてずに引き抜いてゆくんだ。
香織　面白そう！
慶介　駒に点数つける？それとも枚数で競う？

幸生　枚数だな。
慶介　うん。枚数の多い人が勝ちね。
香織　わかった。
幸生　じゃあ、じゃんけんで順番を決めよう。

幸生、香織、慶介はじゃんけんをして勝ったものから時計周りで山崩しを始める。そこにインターホンが鳴る。

文子　文代かしら。
美里　私、出ますね。
文子　いいの、私出る（去る）
文義　親父。
幸生　（見向きもせずに）なんだ。
文義　さっきの話の続きだけど、姉ちゃんがさ・・・
幸生　おお、香織なかなかやるなあ。
香織　私、こういうの得意なの。
幸生　山崩しの棋士なんかないからな。
香織　あ、いま、カチって鳴らなかった？
慶介　鳴ってないよ。
香織　嘘だ、鳴ったよ。
慶介　鳴ってないって。
幸生　まあまあ、一回くらい大目に見てやろう。
慶介　鳴ってないってば。
文義　親父。真面目な話なんだからさ。

文代と美里が登場。文代は傘のプレゼントを持っている。

文代　お父さん。
幸生　なんだ、お前も来たのか。
文代　なんだはないでしょ。これ、はい。お誕生日おめでとう。
幸生　ありがとう。そこに置いといて。

文代　なんか機嫌悪いの？
文義　知るかよ。
文子　いい加減にしてよ。
幸生　・・・
文子　お父さん！
幸生　そんな大きな声を出さなくても俺の耳はまだ聴こえるよ。
文子　このままお父さんを一人にしておくのは、私たち心配だって言ってるの。
幸生　俺はまだ元気だ。
文子　そうね、元気そうでなにより。でも、変な業者がこの家によく来てるそうじゃない。
幸生　何のことだ。
慶介　掃除屋だよ。
幸生　ああ。島村さんか。明日も来てくれるよ。
文義　何しに？掃除するほど汚れてないだろ。
幸生　次は俺の番だな。
文義　親父。
幸生　（将棋を続けている）
文義　親父はその業者にボッタくられてるんだよ。
文代　最近、高齢者狙いの詐欺が多いんだよ？
幸生　お前たちには見えないんだ。
文義　何が？
幸生　この家の汚れが。
文義　・・・はじまったか。
文代　お兄ちゃん。
文子　お父さんよく見てよ。この家、確かに古いけど掃除屋が入るほど汚れてなんかないでしょ。
文代　そうだよ、ドブにお金捨ててるようなもんだよ？
幸生　（将棋を続けている）俺が俺の金をどう使おうと、それは俺の勝手だ。それにお前たちへの財産もいくらかある。
文義　そんなことを言ってるんじゃないんだよ。

幸生　いや、それは俺のお前たちへの気持ちだ。それくらいしか出来ない。だから、もう何も言わないでくれないか。
文義　じゃあ現実問題どうするんだよ。
幸生　しつこいな、お前たちは。俺はまだ元気だって言ってるだろ。
文義　元気でもひとりで暮らしてゆくのは不便だろ、なにかと。
幸生　そんなことはない。
文代　折角お姉ちゃんがお父さんと一緒に暮らす気になったんだよ？
幸生　断る。
文子　お父さん！
幸生　・・・俺も、いつかは母さんみたいにおむつをしないと生活出来なくなるかもしれない。けれど、息子や娘に嫌々それをしてもらって生きてゆくくらいなら、他人様にお金を払ってしてもらった方がいい。
文義　だから姉ちゃんが・・・
幸生　（遮るように）文子には世話にならん！もう決めたんだ！
文子　そんなに私が嫌？
幸生　お前が嫌なんじゃない。お前に世話になるのが嫌なんだ。
文子　同じことじゃない。
幸生　俺は哀しかった。
文義　何が。
幸生　お前と母さんのやり取りだ。
文子　私だって、母さんにあんな言い方なんかしたくなかったわよ。
幸生　そういう事を言っているんじゃない。
文子　え。
幸生　でもな、お前が生まれたころ、まだおむつなんてものはなかった。おしめだった。俺や母さんはお前たちのおしめを変え、汚れたおしめを手で洗い、お前たちを育ててきた。大変だったが一生懸命だった。辛かったが母さんはいつも笑顔だった（将棋をやめて）お前はどんな顔をしてた？お前を責めているわけじゃない。俺はお前たちにあんな顔をさせたくないだけだ。
文子　・・・
幸生　文子、文義、文代。

文子　はい。
文義　ん。
文代　なに。
幸生　色々と心配かけてすまない。

間

幸生　美里さんも今日はこんな老いぼれの誕生日なんかを祝いに来てくれて、どうもありがとう。ご飯、美味しかったです。
美里　お義父さん・・・
幸生　また今度、将棋しような。
慶介　え。
香織　うん。
幸生　お爺ちゃん、今日はもう疲れたから先に寝るよ。
文子　お父さん。
幸生　みんな、今日はどうもありがとう。おやすみ（去る）
文義　相変わらず頑固だよな。
文子　本当だよ、もう。
文代　母さんの時よりも手古摺りそうね。
美里　どうするの？
文義　どうしようもないだろ。
文代　時間をかけて説得するしかないんじゃない。
文子　そうね。
香織　あのさ。
文子　ん。
香織　お母さんたちはいったい何がしたいの？
文子　は？
美里　香織ちゃん、それ、どういう意味？
香織　だってさ、お爺ちゃん、お母さんと私と一緒に暮らすの嫌なんでしょ？
文子　だからって、このまま一人にしておけないでしょ？

香織　一人にしておけないから一緒に暮らすの？
文子　仕方ないでしょ。
香織　お爺ちゃん、その仕方ないって思われてるのがわかってるんだって。だから嫌なんじゃないの？
文子　あんたまで。
美里　でもね、このままって訳にもね。

明転

8（ふれあう日々の中で）

正代邸。幸生が現れる。手にはコップと石鹸、カッターとストローを持っている。椅子に座り、石鹸を削る。削った石鹸をコップに入れ、ストローでかき混ぜる。そこに真理が現れる。

真理　洗い物と洗濯終わりました。
幸生　御苦労さま。
真理　次、何をすれば？
幸生　開けてくれる？
真理　え？
幸生　窓。
真理　あ、はい（窓を開ける）
幸生　（ストローでしゃぼん玉を飛ばそうとするがストローからしゃぼん玉は一つも出ない。根気よく、何度かストローを吹く。が、しゃぼん玉は一つも出ない）
真理　しゃぼん玉ですか？
幸生　うん。でも、うまくいかないんだよ。
真理　どうしたんですか、急に。
幸生　新人さんが、今、お風呂の掃除してくれてるでしょ。
真理　もしかして泡だて過ぎて・・・
幸生　そう。飛んでた。

真理　ああ。すみません。
幸生　ううん。それで思いだしてね。
真理　何をですか？
幸生　そこの土手から子供たちとよく飛ばしたんだ。
真理　・・・私も小さい頃、あの土手で母とよく。
幸生　しゃぼん玉飛ばした？
真理　はい。
幸生　そう。お母さんは元気にされてるの？
真理　高校に上がった時に病気で・・・
幸生　亡くなられたの？
真理　はい。
幸生　ああ、ごめんね。
真理　いえ。もう随分と前ですから（間）だからって言うわけでもないんですけど、私、高校２年生の夏に中退したんです。
幸生　え。
真理　ハウスクリーン島村はもともと父と母がやってたんです。母がいなくなって、父が会社を守りながら男手一つで私を育ててくれて。卒業したらこの仕事手伝うつもりでいたので。
幸生　そう。
真理　でも、そんな父も祖父の手一つで育ったらしくて。だから父の気持ちわかるなって・・・なんとなくですけど。
幸生　大変でしょ、この仕事。
真理　はい。働きだした頃なんか、仕事帰りにあの土手で同級生たちとばったり会うこともあって、みんなは可愛い制服を着てるのに私はこれを着てるんです。
幸生　頑張って生きてきたんだね。
真理　（満面の笑顔で）はい。でも今はとっても充実してます、毎日。
幸生　それは良かった。
真理　はい。
幸生　お父さんって、あの、ちょっと老けてる人？
真理　そうです。

幸生　道理で。
真理　あ、だから老けたのか。
幸生　ねえ。
真理　はい。
幸生　昔、子供たちと作った時は、これで飛んだんだけどね。
真理　玉川の土手から飛ばしてみましょうか？
幸生　そうしたいんだけど（ストローを吹くがしゃぼん玉は出ない）

奥から河嶋が登場。

河嶋　お風呂の清掃終わりました。
幸生　あ、御苦労さま。
河嶋　では作業後のご確認を。
幸生　見なくても大丈夫です。
河嶋　え。
真理　（河嶋に目配せをする）
幸生　（ストローを吹く。が、一向にしゃぼん玉は飛ばない）
河嶋　懐かしいな。
真理　河嶋さんもやりました？
河嶋　勿論。
真理　でも飛ばないんですよ。
幸生　コツがあるのかな。
河嶋　何を入れました？
幸生　石鹸とお湯。
河嶋　なるほど。真理さん。
真理　はい。
河嶋　今日ってキッチン用の中性洗剤持ってきてましたっけ？
真理　ええ。
河嶋　じゃあ、お湯を２０、洗剤を３、それと洗濯のりってありましたっけ？
真理　はい。

河嶋　洗濯のりを１０の割合で作ってみて下さい。あとシロップ。
真理　シロップですか？
河嶋　ええ。
真理　本当に？
河嶋　ええ。
真理　ないですよね？
幸生　シロップってガムシロップでいいの？
河嶋　大丈夫です。
幸生　台所にあるよ、沢山。
真理　え、じゃあ、ちょっと見てきますね（去る）
幸生　前は何をやってたの？
河嶋　前と言いますと？
幸生　新人なんでしょ、あなた。
河嶋　あ、はい。
幸生　その前の仕事。
河嶋　・・・教師です。
幸生　そう。
河嶋　中学校で理科を教えていたものですから。
幸生　だから詳しいんだね。
河嶋　ああ、そうですね。
幸生　どうして学校の先生から掃除屋さんに？
河嶋　色々とありまして。
幸生　そういう顔してる。
河島　え・・・
幸生　冗談ですよ。
河島　はあ。
幸生　あなた、色黒だから体育の先生かと思った。
河嶋　よく言われました。あ、でも、野球部の顧問でしたから。
幸生　そう。
河嶋　・・・
幸生　ん？

河嶋　（周りを気にして）実は教え子が、この掃除屋の経営者なんです。
幸生　あの老けた人。
河嶋　そうです。あ、他の従業員には内緒でお願いします。
幸生　どうして？
河嶋　部下になる訳ですから、昔の関係は無い方がいいかと。
幸生　でも消えたりはしないでしょ？
河嶋　何がですか？
幸生　しゃぼん玉みたいに。
河嶋　・・・二人になると今でも先生と呼んでくれます。
幸生　どんな生徒だったの？
河嶋　うちの社長ですか？
幸生　うん。
河嶋　彼は3年生の時に交通事故で母親を亡くしましてね。それが夏の都大会の決勝前日だったんですよ。僕は彼の担任でもあったので、その事は知っていたんですけど、チームメイトには大会が終わるまで言わないでほしいって言うんです。当時、１５歳ですよ。試合中は母親を亡くした素振りなんか少しも見せずにバッターボックスに入るんです。でも負けてしまったんですね。他の生徒はニキビだらけの顔を皺くちゃにして泣くんですけど、彼はまったく泣かなかった。それどころか泣いているチームメイトを励ますんです。こいつは強いなって思いましたよ（去る）

河嶋の台詞の途中で舞台手前に夏雄が登場。窓拭き清掃をしている。幸生は椅子に座ったまま、コップの中のしゃぼん玉液をストローでかき混ぜている。つまり別の日になっている。夏雄の窓清掃が終わる。

夏雄　よしっと。
幸生　そのまま、窓を開けっ放しにしておいてくれる？
夏雄　わかりました。
幸生　（ストローでしゃぼん玉を飛ばそうとするがストローからしゃぼん玉は一つも出ない。根気よく、何度かストローを吹く。が、しゃぼん

玉は一つも出ない）
夏雄　あ、しゃぼん玉ですか。
幸生　僕が作ると飛んでくれないんだよ。
夏雄　じゃあ買ってきましょうか？
幸生　こないだあなたの娘さんに作ってもらった時は飛んだんだけどね。
夏雄　あいつ、仕事もせずにしゃぼん玉遊びしてたんですか？
幸生　いやいや、僕がお願いしたんだ。
夏雄　え。

珠美が買い物袋を二つ持って登場。一つはスーパーなどで購入出来る、日常食用品。もう一つは生活用品。

珠美　ただいま戻りました。
幸生　御苦労さま
夏雄　お帰り。
幸生　どうですか？
珠美　え？
幸生　お身体。
珠美　あ、いつも通りです。
幸生　あんまり無理しないでね。
珠美　はい。
幸生　もう、どっちだかわかったの？
珠美　はい、女の子です。
幸生　そうかい。楽しみだね。
珠美　ありがとうございます。あ、今日は何合研げばいいですか？
幸生　僕だけだから一合で大丈夫です。
珠美　畏まりました（台所へ去る）
幸生　そういえば娘さんも結婚されるんですってね？
夏雄　ええ、いっちょ前に。
幸生　塚原さんでしょ？
夏雄　あ、知ってたんですか。

幸生　娘さんが教えてくれました。
夏雄　仕事もせずに惚気てたでしょ。
幸生　あの人、真面目だから、娘さんきっと幸せになるよ。
夏雄　そうだといいんですけど。
幸生　じゃあ、あれか。家を出てゆくんだ？
夏雄　それが、そうなるはずだったんですけど、急に一緒に住むってあいつら言い出して。
幸生　そう。
夏雄　はい。
幸生　それは寂しくないね。
夏雄　ええ（間）あ、いや、そんなこともないです。どうせ煙たがられるんですよ、そのうち。
幸生　僕ね。
夏雄　はい。
幸生　いなくなるんだ。
夏雄　何がですか？
幸生　もうすぐ、この家から。
夏雄　え？

玄関のチャイムが鳴る。

夏雄　あ、自分出ます（去る）

幸生は椅子に座ったまま、コップの中のしゃぼん玉液をストローでかき混ぜている。つまり別の日になっている。園浦が奥から登場。

園浦　トイレ清掃、終わりました。
幸生　御苦労さま。窓、開けてくれる？
園浦　はい（窓を開ける）あ、何とかもちそうですね。
幸生　天気予報では夕方から雨だけどね。
園浦　あらら。じゃあ今日は延期ですかね？

幸生　玉川の花火大会は延期がないんだよ。
園浦　え、じゃあ中止ですか？
幸生　去年は降ったりやんだりのなかやってたから、今年も同じ感じだろうね。よっぽど荒れないと中止にはならない。
園浦　世田谷、タフっすね。
幸生　なんだか台風も近づいているみたいだね。
園浦　そうなんですか？
幸生　来週には関東に上陸するようだね（ストローを吹く。が、一向にしゃぼん玉は飛ばない）
園浦　来週は台風か（間）キッチンの方、まだ塚原がやっておりますけど、私、今日は先に上がります。
幸生　次の現場？
園浦　いえ・・・オーディションなんです。
幸生　オーディション？
園浦　はい。夕方から。
幸生　ああ。この間、夢があるって言ってたね。
園浦　・・・
幸生　その話じゃなくて？
園浦　今回落ちたら、もう諦めるつもりです。
幸生　どうして？
園浦　歳も歳ですし。
幸生　まだ若いでしょ？
園浦　４１歳、厄年です。
幸生　そ、そうなの。
園浦　（幸生の返答に気まずくなり何かの変身ポーズをする）
幸生　どうしたの？
園浦　今、変身しました。
幸生　変身？
園浦　はい。子供たちのヒーローです。
幸生　（笑っている）
園浦　（調子に乗って、空気と闘う）

幸生　それは何をしてるの？
園浦　闘っています。
幸生　誰と？
園浦　敵です。
幸生　敵って？
園浦　え。悪者です。
幸生　悪者って。
園浦　悪い事をする奴らです。
幸生　悪い事って。
園浦　人を苦しめたり貶めたり騙したりする奴らです。
幸生　誰がそんな酷いことをするんだ！
園浦　えっと・・・だれですかね。
幸生　（笑う）
園浦　でも、困っている人がいたら助けるのがヒーローです。
幸生　困っている人・・・
園浦　実は今までは、そっち側の役ばかりだったんです。
幸生　そっち側の？
園浦　主役のヒーローがいて『地球の平和は俺が守る！』で、悪役のボスが『小賢しい奴め、やっつけてしまえ！』っているんですけど、そのボスには沢山の下っぱがいて、所謂雑魚キャラ、そんなのばっかりやらされてて・・・
幸生　もしかしてさ。
園浦　はい。
幸生　（ショッカーの真似をして）ウゥゥー！
園浦　・・・え。
幸生　あれ・・・ウゥゥ・・・
園浦　あ、ああ！ウではなくイですね。
幸生　イか。
園浦　はい！そうです。イィィ！
幸生　ああ、それだ。
園浦　知ってるんですね。

幸生　息子が小さい頃、一緒によく観てたからね。
園浦　（全力で）イィィィィィィィ！
幸生　おお。やっぱり上手だね。
園浦　ありがとうございます。イィィィィィィィ！
幸生　イィィ！
園浦　そうです、そうです。イィィィィィィィ！です。
幸生　イィィィィィィィ！
園浦　出たな、ショッカー。
幸生　え。
園浦　（再度返信ポーズ）ライダー変身！トォ～！
幸生　イィィィィィィィ！

奥から塚原が登場。

塚原　何やってるんですか？
幸生・園浦　あ。
塚原　今日、オーディションでしょ。
園浦　そうだよ。
塚原　終わったんだったら、先に上がっていいですよ。
園浦　うん、お疲れ様。正代さん、また。
幸生　頑張ってね。
園浦　イィィィィィィィ！（去る）
塚原　本日の作業、終了致しました。
幸生　御世話様。
塚原　作業後のご確認を。
幸生　信用していますから。
塚原　ありがとうございます。
幸生　叶うといいね。
塚原　え。
幸生　ヒーローになるの。
塚原　ああ。

幸生　でも、僕にとってはヒーローだったのかもしれない。
塚原　え。園浦さんがですか？
幸生　（笑っている）
塚原　え。え。どういう意味ですか？
幸生　彼だけじゃなくて、ハウスクリーン島村の皆さん。
塚原　（照れ笑い）ただの掃除屋です。
幸生　塚原さん。
塚原　はい。
幸生　今日で最後にして下さい。
塚原　何をですか？
幸生　お掃除。
塚原　え。
幸生　今まで、どうもありがとうございました。皆さんにもよろしくお伝えください。
塚原　あ、え、あ、その、あ、はい、（ファイルを見せ）あ、あの、あ、これ、本日の金額になります。
幸生　（ファイルを見て）おつりあるかい？
塚原　はい、車に。すぐに戻ってきます。
幸生　悪いね。
塚原　いえ。では、こちらの方にいつものサインを（去る）
幸生　いつものサイン・・・か（サインをする。重ねるようにして、またサインをする。それを何度も何度も繰り返す。その手が段々と早くなり、やがてしゃぼん玉が消えるようにサインをする手が止まる）

　幸生は椅子に座ったまま、コップの中のしゃぼん玉液をストローでかき混ぜている。つまり数時間後。玉川花火大会開催を知らせる空砲のみの花火の音が数発聞こえる。コップをテーブルに置き、窓際へ。いつの間にか浴衣姿の百合子も登場している。

幸生　お、やっぱり、やるようだな。
百合子　そうみたいですね。

幸生　このまま降ってこなけ・・・（百合子を見て）なんだか、ずるいなという気がしてくる。
百合子　どうして？
幸生　お前ばっかり。
百合子　じゃあお婆さんの姿に戻りましょうか？
幸生　いやいや、いいんだ、それでいい。それがいい。
百合子　（微笑む）
幸生　（すごく嬉しそうな表情をするが、ふと真面目な顔に戻る）
百合子　どうしたの？
幸生　喜ぶのもなんだか申し訳ない気がしてくる。
百合子　ありがとう。
幸生　え（間）うん。

二人並んで縁側に座り外を眺めている。

百合子　決めたの？
幸生　ああ。
百合子　そう。
幸生　バカだな。
百合子　誰が？
幸生　俺だよ。
百合子　どうして？
幸生　島村さんに掃除してもらっても仕方がなかったのにね。
百合子　そう？
幸生　うん。
百合子　私は良いと思うわ。
幸生　そうかい。
百合子　だって。
幸生　なんだい？
百合子　私とばっかり話していても。
幸生　ますます、ぼけ老人の戯言になるかい。

百合子　（笑う）
幸生　なんだい。
百合子　ううん。でも家族にだってあるのよ。
幸生　何が？
百合子　この家にある、落ちない汚れのようなものが。
幸生　知ってるよ。
百合子　それも家族なのよ。
幸生　・・・知ってるよ。
百合子　そう。

再び空砲が何発か聞こえる。

幸生　（腕時計を見て）まだ一時間以上もあるよ。
百合子　楽しみね、花火。
幸生　今年はどんな花を夜空に咲かせてくれるのか。
百合子　うん。
幸生　すぐに消えてゆくから綺麗なんだろうね。
百合子　花火？
幸生　うん。
百合子　私もそう思う。
幸生　（間）そうか。
百合子　なに？
幸生　しゃぼん玉も消えてゆくから、また飛ばしたくなるんだね。
百合子　ねえ。
幸生　なんだい。
百合子　続き、やりましょうよ。
幸生　うん、でも俺が作ると、飛ばずに消えるんだよ。
百合子　（幸生が使っていたコップを手に取りしゃぼん玉を吹くと沢山のしゃぼん玉が出る）
幸生　わあ。
百合子　（微笑み、去る）

沢山の飛んだしゃぼん玉を眺めて喜ぶ幸生。すると文子、文義、文代、美里、慶介、香織が現れる。それは現実の彼らではなく、幸生の過去の記憶と現実が入り混じっていて、皆がしゃぼん玉を飛ばし、幸せそうな正代家がそこにはある。

フラッシュ。近い落雷。幸生以外の人物がストップモーション。幸生だけが窓際へゆっくりと近寄る。段々と雨が降り出す。強くなってゆく。雷も聞こえる。ストップモーションしている人物が無機質に去ってゆく。

幸生　（しばらく驟雨を眺め心ここにあらず。不意に我にかえり、長年暮らしてきた自分しか居ない家を見渡す）

明転

9（旅立ちの朝）

風の強い音が室内まで聞こえるハウスクリーン島村の事務所。島村の面々が朝礼の構図になっている。正面奥に夏雄が立ち、そこからハの字に整列する。上手側に真理と珠美。下手側に塚原と園浦、そして河嶋がいる。従業員たちは夏雄の言葉に復唱して

一日一日の毎日とは（一日一日の毎日とは）
あなたの過ごす人生が（私の過ごす人生が）
辛く哀しく汚れていても（辛く哀しく汚れていても）
優しく嬉しく美しい物へ（優しく嬉しく美しい人へ）
生まれ変われる大切な一日です（生まれ変われる大切な一日です）
己の損得勘定よりも（他人を喜ばせる愛情を）
他人の薄情を知っても（己の人情を忘れずに）
常に心を豊かにして（常に心を豊かにして）

生きがいのある毎日にすること（生きがいのある人生にすること）
私たちはそれを（幸せと呼びます）

夏雄　今日も一日、よろしくお願いします！
塚原　（テンション低く）よろしくお願いします。
夏雄　よろしくお願いします！よろしくお願いします！よろ・・・なんだよ～。
園浦　だって。なあ。
珠美　うん。
河嶋　そうですね。
真理　仕方ないよ、お父ちゃん。
夏雄　勤務中！
真理　仕方ないですよ、社長。こんな日にお客さんの家に行っても迷惑になるんじゃないですか？
夏雄　だったらキャンセルなり日時変更なり、電話があってもいいだろ。ないってことは、掃除しに来てほしいってことだ。なあ、塚。
塚原　そうですね。
珠美　でもねえ。
園浦　現場に行くのも大変ですよ。
夏雄　仕事は仕事だ。ちゃんと清掃道具、車に積んであるか？
園浦　二号車、ＯＫです。
塚原　一号車も大丈夫です。

事務所の電話が鳴る。真理が出る。

真理　ハウスクリーン島村です。
夏雄　はい、じゃあ今日の作業内容お願いします。一号車担当。
塚原　二子玉川の篠崎邸、お風呂とトイレと洗面所、塚原と珠ちゃんで入ります。午後から桜新町の中川邸、エアコン清掃、同じく塚原と珠ちゃんで入ります。
夏雄　よろしくお願いします。

真理　社長。
夏雄　ん。
真理　二子玉川の篠崎さん日時を変更してほしいそうです。
夏雄　え。
園浦　やっぱり飛んだか。
夏雄　じゃあ、塚と珠ちゃんは中川邸、エアコン清掃をしっかり頼む。
塚原　了解しました。
珠美　了解です。

事務所の電話が鳴る。真理が出る。

真理　ハウスクリーン島村です。
夏雄　はい、じゃあ二号車担当。
園浦　狛江の西原ビル３階オフィス、ワックス塗り替え、園浦と河嶋さんで入ります。
夏雄　よろしくお願いします。
真理　中川邸も別の日に変更してほしいそうです。
珠美　あ～あ。
夏雄　あ～あじゃないよ。
園浦　じゃあ今日は、俺たちの現場でワックスの手伝いだね。
夏雄　そうしてくれ。
塚原　了解しました。
珠美　了解です。

事務所の電話が鳴る。真理が出る。真理以外は電話のやり取りを気にする。

真理　ハウスクリーン島村です。はい、はい、あ、いつもありがとうございます。え。あ、そうですか、そうですよね。わかりました。では来週ということでよろしいですか？はい、畏まりました。失礼致します。

間

真理　（みんなに電話の内容を報告しようとするが）

夏雄　（遮るように）言わなくていい。

風の強い音が聞こえる。

真理　そしたら事務所と倉庫の掃除、あと備品チェックお願いします。

園浦　じゃあ、自分、倉庫。

河嶋　私も。

珠美　備品チェックします。

真理　お願いします。

園浦、河嶋、珠美、去る。夏雄が頭を抱えて座っている。

塚原　じゃあ、俺、トイレ掃除してくる（去る）

真理　はい。

夏雄　あ～あ。

真理　あ～あ、じゃないでしょ。事務所掃除してよ（伝票をチェックしている）

夏雄　お前、何するんだよ？

真理　伝票チェック。

夏雄　そんなの今しなくてもいいだろ。

真理　（電話する）ハウスクリーン島村です。お世話になっております。あのですね、床のワックスなんですけれども前回やらせて頂いたのが、もう一年前、え、あ、そうですか、あの、秋口から年末にかけてキャンペーンもやっておりますので、はい、はい、是非よろしくお願いいたします。はい、失礼します。

夏雄　（ホウキを持ってきて掃除している）

真理　（別宅に電話する）ハウスクリーン島村です。こんにちわ、ご無沙汰しております。はい、お元気ですか、うふふふ。あのですね、レンジ

フードなんですけれども、前回やらせて頂いてからもう半年たちますので、そろそろ如何かなと思いまして、はい、はい（間）はい！あ、年末ごろ、わかりました。では、その頃、またこちらからお電話さしあげますので、はい、はい、よろしくお願いいたします。はい、失礼します。

夏雄　（掃除しながらため息）

真理　秋口から年末に向けて増えてくるから。毎年、そうでしょ。

夏雄　そうだけどさ、流石に不安だよ。世の中、不景気過ぎて。正代さんのとこも終わっちゃったしさ。

真理　寂しいね。

夏雄　仕事が無いのは寂しいよ。

真理　断ろうって言ってたのに、気が付いたらあのお爺ちゃんに懐いてたわけでしょ、みんな。

夏雄　・・・掃除してえなぁ。

真理　（太いファイルを開いている）あれ。

夏雄　どうした？

真理　正代邸って先週が最終だったよね？

夏雄　ああ、何か問題でも？

真理　その日の請求書領収書の控えがないから。

夏雄　塚か園浦が持ってるんじゃないか？塚！塚！

塚原が戻ってくる。

塚原　はい。

真理　先週入った正代邸の請求書領収書の控え、持ってる？

塚原　（仕事中にいつもぶら下げているポーチの中に手を突っ込む、くしゃくしゃになった紙を出す）

真理　請求書領収書の控えは事務所に戻って来たら、どうするんでしたか？

塚原　今、持っていらっしゃるファイルに挟みます。

真理　それは何んですか？

塚原　先週の請求書領収書の控えです。
真理　何でその汚ったないポーチに入っていたんですか？
塚原　忘れていました。
真理　くしゃくしゃになっていますけど？
塚原　そうみたいです。
真理　そうみたいじゃないでしょ。
塚原　すみません。
真理　忘れないでね。
塚原　はい、以後気を付けます。
夏雄　お前、それで良いのか？
塚原　すみません。
夏雄　考え直すんだったら今のうちだぞ。
塚原　何がですか？
夏雄　結婚。
塚原　え。
夏雄　間違いなくかかあ天下だぞ。
真理　社長。
夏雄　はい。
真理　掃除して下さい。
夏雄　はい。
真理　塚ちゃんは、それ挿んで。
塚原　はい（ファイルに控えを挿もうするが、手元にある伝票のサインを見て動けなくなる）
夏雄　どうした？
塚原　正代さんのサインなんですけど。
夏雄　おお、達筆だろ。
真理　凄い綺麗だよね。
塚原　これ、先週の控え（二人に控えを見せる）
真理　え・・・
間

塚原　ご家族とですよね。
夏雄　何が？
塚原　正代さん、いっしょに暮らすんでしょ。
夏雄　知らねえよ。
塚原　言ってたじゃないですか、以前。
夏雄　あの家からいなくなるとは聞いたけどさ。
塚原　どこへ行くか聞かなかったんですか？
夏雄　聞こうと思ったら、丁度、あの小憎たらしい孫が来てさ、また来てるって顔するんだよ。
真理　怖いって言ってた。
塚原　何が。
真理　子供たちに遠慮しながら暮らすの。

風の強い音。夏雄、真理、塚本は退場。
台風の真っただ中。正代邸。美里と慶介がいる。慶介は心配そうに窓の外を見ては落ち着かない様子。美里は電話中。

美里　あ、もしもし。あなた、私。うん。やっぱりいないよ。うん。うん。だから、家のどこにもいないんだって。うん。文代ちゃん？うん、電話したよ。仕事中だから昼にかけなおすって。うん。警察に電話した方がいい？だって・・・うん。わかった、そうする。あ、今、姉さんと香織ちゃんも来た。じゃあここにいるね。うん。うん。

文子と香織が登場。少し雨に打たれている。息も切らしている。

文子　見付かった？
美里　まだなんです。
香織　マジで？
慶介　うん。
文子　文義はなんて？

美里　そのうち帰ってくるだろうって。
文子　なに暢気なこと言ってるのよ、こんな天気なのに。
美里　すみません・・・
文子　何で急にこんなことになったの？
美里　さあ。でも慶介が心配だからって、今朝お義父さんに電話したんです。
文子　じゃあ、お父さん何て？
慶介　今から買いに行くんだって。
香織　何を？
慶介　・・・しゃぼん玉液。
香織　は。
文子　何でそんなものを？
美里　さあ。ただ、最近はよくしゃぼん玉遊びをしてたみたいなんです。
文子　お父さん？
慶介　僕、もう一度探してくる（去る）
美里　あ、ちょっと、慶介！
香織　私も（去る）
文子　香織！香織！

風の強い音が聞こえる。

美里　どこに行ったのかしら。
文子　何なの・・・
美里　え。
文子　しゃぼん玉？
美里　・・・
文子　そんなの必要ないでしょ、こんな日に。

暗転

文子、美里は退場。明転。玉川の土手。途轍もない風が吹いている。そ

れに伴い横殴りの雨が降っている。そこには合羽を着て傘をさす幸生が立っている。風に煽られながら、負けないように立っている。さらなる突風で傘が持っていかれそうになる。

暗転

１０（しゃぼん玉の欠片を眺めて）

某老人ホームのロビー。施設従業員の田中が机に座って書きものをしている。電話が鳴る。

田中　はい、はい。では今、開けますので、そのまま中にお入り下さい。はい、車ですか？外来用の駐車場がありますので、そこに止めて下さい。はい、よろしくお願いします（電話を切り、違うところにかける）受付の田中です。今、お見えになられたんですけど（ファイルを確認しながら）３０６、５０３、それと７０２号室の３部屋で大丈夫なんですよね？わかりました。はい、はい。

田中は電話を切ると書きものを始める。そこにハウスクリーン島村の真理が事務姿で登場する。そしてお腹が少し大きい。ファイルを持っている。

真理　ハウスクリーン島村です。
田中　あ、お待ちしておりました。
真理　（名刺を渡し）塚本と申します。この度は当社への清掃依頼ありがとうございます。
田中　こちらこそ、宜しくお願いしま・・・
真理　あ、８か月なんですね。
田中　おめでとうございます。
真理　ありがとうございます。早速ですがお部屋を確認させて頂いても

よろしいでしょうか？
田中　はい、お願いします。
真理　（ファイルを確認して）１ルームタイプのお部屋を３部屋で？
田中　はい。そうですね。あ、あの。
真理　はい。
田中　定期契約というのは可能でしょうか？
真理　はい、勿論です！ありがとうございます。
田中　良かった。わりと入居者の出入りがあって。
真理　あ、そうなんですね。ご自宅に戻られたりですか？
田中　いえいえ。病院へ移られたり、亡くなられたりです。
真理　はあ、そうなんですね。
田中　では（ファイルを渡し）こちらの方に書いてある部屋の清掃をお願いします。
真理　３部屋、全ルームの窓、洗面所、トイレ、エアコン、床のワックスですね。
田中　はい。

夏雄、園浦、珠美、河嶋が掃除道具を持って登場。

夏雄　失礼します。
田中　凄い道具ですね。
真理　ええ、掃除屋ですから。
田中　そうですか。あれ、もしかして車二台で来られています？
真理　はい。
田中　すみません、外来用駐車場一つしか空いてなくて。
夏雄　あ、大丈夫です。今、従業員がパーキング探してますから。
田中　そうですか、では、こちらへどうぞ（奥へ去る）
夏雄　何号室から？
真理　７０２。
夏雄　了解（携帯を出して電話する）

田中に続いて、真理、園浦、珠美、河嶋が去る。。

夏雄　もしもし。おう。パーキングあった？あ、そう、わかった。じゃあ７０２号室から始めてるから。うん、うん。はい（電話を切り去る）

幸生が登場。座って外を眺めている。そこに田中が戻ってくる。

田中　あら、どうしました？
幸生　落ち着かなくてね。
田中　不安になるような事でもありましたか？
幸生　いえ、大丈夫です。
田中　何かあったら、いつでも相談して下さいね。
幸生　はい、皆さんよくしてくれますので。
田中　良かった。
幸生　今日はお天気が良いですね。
田中　そうですね。それ、何ですか？
幸生　しゃぼん玉です。
田中　ああ。
幸生　飛ばしたいんだけど。
田中　いいですよ。じゃあお昼食べてから屋上に行ってみますか？
幸生　はい。

塚原が戻って来る。

塚原　失礼します。
田中　あ、御苦労さまです。エレベーターあちらにありますので。
塚原　よろしくお願いします（去ろうとするが）
田中　お昼が済んだら、私、お部屋にお迎えに上がりますので。
塚原　あの。
田中　はい。
塚原　（幸生に）お久しぶりです。

田中　え。
幸生　（田中に）新人さんですか？
田中　いえいえ、お掃除の業者さんです。
幸生　あ、そう。じゃあ、部屋で待ってるね（去る）
田中　はい。
塚原　・・・
田中　では、事務室にいますので、何かあったら言って下さい（去る）
塚原　（色々なことが走馬灯のように駆け巡り、眉を八の字にする。幸生が去った方に少しの笑顔を見せて去る）

【了】